

# 学習院女子短期大学 国語国文学会 会報

17

昭和63年2月

〒162 東京都新宿区戸山三丁目二〇番一号

学習院女子短期大学国文学研究室内  
学習院女子短期大学

国語国文学会

電話 東京〇三・〇三三・九六六(代表)  
振替 東京六一三二六五四

メリー・ゴー・ラウンド

高橋 新太郎

昨年から今年にかけて多くの知己・友人を喪った。二月四日に文  
化史専攻の佐貫健教授が、八月二十三日には、後輩の佐貫さんに託  
されたかたちで公私にわたって献身的に尽くされた目白の仏文科の  
高木進教授が、そして九月十二日には、家庭生活科の鈴木徳信教授  
が、いずれも癌に冒されて亡くなられた。

佐貫さんとは、酒席を共にすることが多かった。高木さんとは家  
族同士の交流もあって、心安立って教務部長として時間編成その他  
で無理をきいてもらったりした。鈴木さんとは短大入職同期の仲間  
であった。佐貫さん高木さんについては同じ仏文の辻邦生さんが、  
十一月の『新潮』に「あるレクイエム」を書いた。

若い友人山内美穂さんをやはり癌で失ったのは七月三十日であつ  
た。二十九歳だった。美穂さんは東京生まれであつたが、家庭の事  
情で十数回の転校を経て、大阪の池田高校に入学、「羞手帖」「鏡が

くし』等の作品を、アルバイトで稼ぎながら、文庫本版で自費出版。  
昭和五十一年に「花くずし」が十八歳の最年少で『新潮』新人賞候補  
作となり、誌上を飾った。

そんな美穂さんが、文学修業を続けながら、身過ぎ世過ぎで「女  
性自身」のフリー・ライターとなつて上京してから私の縁も生ま  
れた。美穂さんは、自らの暗い情念を呪文のように粘着する実験的  
な文体に定着させようとして苦闘していた。作品世界で、「女性的」  
なるものの闇の部分で嗜虐的なまでに抉つた美穂さんは、また女性  
をしか愛することができない女であつた。「おんなの自己診断学」  
「おんなのつきあい六法」などの本では、各界活躍の女流に伍して切り  
込みの鋭いエッセイも発表していた。特異な才華の結実には、とり  
わけ時の恩寵を必要としたのであつたが……。

娘とほぼ同じ歳ごろで、美穂さんは、私とのつき合いの中で、へ父  
性的なもの求めていたのではなかつたか、と今想ひ返している。  
亡父母の二十七回忌と二十三回忌の法要を、一年早めの九月十三  
日に営んだ。自分自身存命であることの覚束無さがそうさせたのか  
もしれない。身体が不自由ながら、法要を楽しみにしていた母方の  
伯母が、その三日前に逝ってしまった。九十一歳であつた。法要後

の宴席で、酒好きの父方の従兄弟に薦めると、胃潰瘍の手術後であり飲みまぬと、にこやかに言う。瘦せぎすのからだだが、また一段と細くなったことに気づいた。親類縁者の応接にとりまぎれつつ席を離れ、線香をあげに仏間に行った折、従兄弟の妻君がさりげなく後を追ってきてそと私の袖を引いて囁いた。ウチノヒトハシラナイケレド、ガンナンデス……イシヤハ、アト、サンシカゲツシカモタナイツテウンデス……。私は、ダウン症の息子を抱えるこの妻君の、平静さを装うというより達悟の穏やかに似た表情を見つめ続けながら、取り乱してはなるまいと、吾身に言いきかせたが、うなずくばかりだった。

年明けの十三日に関東学院女子短期大学の山下登喜子教授が喪くなられた。昭和五十五年以来、私共の国文学専攻の学生の為に御出講頂いた。佐貫・高木・山下の諸氏、いづれも私と同世代の方達である。一所に乗り合わせたはずの誰れ彼れが、次々と姿を消してしまふ。まわり続ける回転木馬に、ひとり取り残されたような思いの昨今である。

一児の母となった娘が中学生の時、拾い帰った猫も、掬った金魚も、十月と正月に死んで行った。ともに十五年の生であった。

久しく会わない友へ

第十六回卒業 千葉 榎子

エルニーニョ現象のためでしょうか、この夏天候が不順でしたが、お障りも無くお過しのことと存じます。陽差しも低くなり、残暑と

はいえ、秋の気配が漂うこの頃でございます。

五月から十回にわたって、母校での公開講座の通知に接し、子どもべつたりの生活、親の老い、妹たちとの確執等、四十に手が届き、更年期のはしりか、意欲減退を感じていた折でしただけに、なつかしさも手伝って、現状から抜け出す手だての一つになるやもしれぬと、戸山へ足を運んでみました。

朝九時過ぎに、家をあとするには、専業主婦にどっぷり漬かっていた身には、かなりの苦痛を伴うものでございましたが、我身にむち打ち出かけたのでございます。

講演の内容は、文学の中の女性たちで、史記に始まり、万葉集、源氏物語と、講義が進むうちに、意欲が徐々に沸いてきたのでございます。阿部俊子先生、永井和子先生の講義は、豊かな人生経験を基にしたもので、学生の頃はなにげなく、そんなものかと聞き流しておりました内容も身にしみて、思わずうなづく事が、たびたびございました。

文学とは齢を経て、理解できるものではないかと思いました。学生をもう一度やり直せたらどんなにすばらしいかと思つた日々でした。

再び、このような機会に巡り会えれば、是非御一緒したく存じます。

すだく虫の音を聞きながら かしこ